
魔法少女リリカルなのは～闇を背負いし風～

あきよ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 闇を背負いし風

【Nコード】

N6151S

【作者名】

あきよ

【あらすじ】

少女は殺された。二人の男と女に。家族と一緒に殺された。男と女に復讐を誓った少女はそれを最後に死ぬはずであった。しかし、少女は幽霊となり、この世界にいつ続けた。そして、少女は見てしまった。魔法を使い戦う、友人をみたのだ。戦うなのはの姿を。

……狂いだす歯車……

……闇の書の管制人格……

すべての歯車が狂ったとき少女達は何を見るのか……？

魔法少女リリカルなのは 闇を背負いし風 始まります。
変な所があったらご指摘ください。

プロローグの前の話（前書き）

次のお知らせにすべての謝罪をしています。闇を背負いし風を見ていた方はそちらを先にお読みください……。すいませんでした……。これは闇を背負いし風の題名と話を少し変えたものです。闇を背負いし風を見ていた方には申し訳ないことをしました……。

ながら……

はぁ、はぁと息をはきながら、何度めかに転ぶと急に止まった。体中、傷だらけだった。

少女の顔は涙でぼろぼろであった。

可愛らしい顔が恐怖と悲しみに染まっている。

「おかああああああん！おとおおおおおおさん！痛いよう！助けてよう！どこにいるのお？！怖いよお！うわああああああん！うわああああん！」

叫ぶ少女、ついには立つ力も無くなったのか座り込んだ
ついに叫び声も聞こえなくなってしまった

少女の瞳は涙を流すだけで、何も映っていなかった。

その姿はまるで涙を流す壊れた人形のようにだった。

そして、ついに少女の瞳から、涙も止まり1ミリも動かなくなってしまうた。

そのとき、笑い声が聞こえた

「うふふ……あははははははは！！すばらしいわ！なんてすばらしいの！そう思わない？あなたも……」

そういつて狂った笑みを浮かべ笑う女

「僕に話しかけないでくれますか？……とくに貴方の不気味な笑い声を聞いていると……」

「あああゝひどいわねえゝそんな性格に育てた覚えはないのになあゝ……消すわよ？」

女が消すわよ？と言った瞬間、女からすさまじいほどの殺気が放たれる

少女は、私の他にも生き残りがいたことに安心を感じる

「相変わらず、化け物のような量の殺気を出さないでくれますか？気分が害します」

少年（？）は気持ち悪いものをみるような目で女をみつめる

「あああゝいえるようになったんじゃない？おびえるそぶりもなくなってるし……合格！がんばったじゃない！」

「子ども扱いしないでくれますか？そして、私は誰に鍛えられたと思ってるんですか？怪物に鍛えられたんですよ？それで、強くないなどありえませんか」

「もう！素直じゃないんだからあゝ……このこのお！」

「……気持ち悪いです……」

「照れないのおゝかわいいわねえゝ」

「つんつんとひじで突つつく女」

「本当に、子ども扱いをするのはいい加減やめてくれますか？周りから変な目で見られるんですよ……」

「そんな事されたらすぐに、つぶすくせに……よく言えるわねえゝ」
女は歪な笑みを浮かべる

「潰すのは当たり前です。あなただって、わたしにそう教えたでしょっ？」

と少年（？）は歪な笑みを浮かべる

まるで二人は何人も人間を殺してきたような口ぶりだった

「教えたけどあゝ少しは自重しなさい！っていつてるのよあゝ片っ端から潰して見なさい……世界の半分の間人は確実に死ぬわよ？もちろん、私は死なないけどねえゝ」

「あなたを殺そうとしたら逆に殺されますよ……」

「あらかゝ分かってるじゃないゝ」

「分かってなかったら、とつくに殺されてますよ……」

「それは、そうねえ」

「しかし、これはやりすぎではありませんか？」

「ん？なにがあ？」

「……火事の事ですよ」

「そうかしら？」

「そうですよ……」

「これほどの火事となれば当然、警察が嗅ぎつけてきますよ」

「何とかなる！」

「まあ、なりますけど、無駄な殺生は避けたいんですがね……」

「あらかゝ甘いわねえ。でも、大丈夫よ気絶するぐらいにい痛めつけちゃえば、大
・丈・夫」

お知らせです(前書き)

前回のものをすべて削除し、色々書き直しました。

お知らせですは時々、編集して、pvやユニークがいまどれくらいだとかを知らせるトコロにしようと思います。

お知らせは見なくても十分物語に何の支障もないです。(当りまえですが)

お知らせです

2011年 9月13日までのpvとユニーク。

pvが4534でユニークが1014です。

闇風を見ていてくれる皆様、本当にありがとうございます！！
こんなに見てくれていている人がいるのはリリカルなのはの人気から
なのでしょうが、感謝しても感謝しきれません。

感想を下さった、ももも。様、AVEE様。感想ありがとうございます！！
います！！

更新の遅い私ですが、お二人の感想のおかげでいつも見てくれて
いる人がいるんだなあと思うことが出来ています。

時々、皆様に活動報告を覗いてくださると私としては嬉しいです。

(私から見たらブログみたいになってます)

色々と発表していることがあるので見てくださると助かります。

(コメントをもらえると感じますね。もらったことないですが)

これからも更新の遅い私ですが応援してもらえると助かります。

皆様、これからも駄作者あきよをよろしく願います！！

名前を出してすみません。ももも。様、AVEE様。

お知らせです(後書き)

色々と時間が余ったからこそでなにかを企画をしようと思っ
てます。ランキングなど……。するかは私の更新スピード
しだいです。

プロローグの前の話（前書き）

少々変です（かなり変です）が読んでもいいよーって人はお読みください。読んでください

プロローグの前の話

この人たちは何を言ってるの？

「ここにいるものはすべて死んでいるのですよね？」

「そうよー」

と女は能天気な声で答える……

人を殺しているのに……

え？死んで？皆……死んでるの？うそ！うそ！うそ！うそ！そんな分けない！皆、生きてるはず！これは夢だはずだから！！皆、生きてるはずなんだ！！死んでるなんて……うそに決まってる！！！！
「さてこれからどうしますか？」

「とにかく、ここをでてどこかにいこー！」

私の目は見えない、何を言っているかはこんな状態の私でもよく分かる。

この人たちが殺した私の家族を大好きな家族を……

夢ならよかった。でも……

夢じゃないんだ。

でも、もしかしたら……

「何で、貴方はそこまで能天気なのですか……」

「それは、私はその性格だからよ！」

「貴方は人を殺しても何もかんじないのですね……」

「いまさら、何かを感じても意味がないじゃない。私達は生きることも死ぬことも許されないのよ？」

そういつて歪な笑みを顔に浮かべる

「そうですか……少しは人間のような感情は残ってないのですか？」

「貴方……人間にでもなつたつもり？」

おぞましいほどの殺気が少年（？）に向けられる

「そんなことありません……ただ、「ただ……何？」ただ、昔は人間だったのですから……少しのこっつていると」

「持っているわけないでしょー？何もかもすてたんだからあゝ」
笑顔で言う女

「そうですね……何もかも、人間だった記憶も過去も……」
やっぱり、本当にこの人たちが殺したんだ

あの人たちが来なければ……

私達、家族は死ななくてよかつたんだ

ずっと、もっと、先まで生きる事ができたんだ

許さない！許さない！許さない！許さない！許さない！許さない！
許さない許さない許さない許さない！！！！！！！！！！殺してや
る！殺してやる！殺してやる！殺してやる殺してやる殺してやる殺
してやる殺してやる！！この未来が血で染まっても、あいつらだけ
は絶対に殺してやる！！！！！！！！！！

少女は復讐を胸に抱いた

突如、少女から闇に近い。

否、闇そのものをだしていた。

闇は鈍く輝きながら広がっていく

その少女から溢れ出す負の感情、その象徴たる闇にきずくと、とた
んに振り返る女と少年（？）

「な、な、なんでこんなものがこの世界にあるのよ！！！！！！」

驚愕の表情を浮かべる女

「何でこんなものがこの世界にあるのよ！可笑しいじゃない！ミカ
エルだなんて！！！！ミカエルがこの世界にずっといたって言うの！
？ずっと探していたのよ！？今までの私の努力、どうしてくれんの
よ！まさか、ミカエルがこんな所にいるなんて……………フフ……………いい
機会だわ……………私の今の力も試す事もできるし、これで捕らえて持つ
て帰りましょう……………」

歪な笑みを浮かべる女

「勝算はあるのですか？」

「久しぶりにミカエルと戦うのよ？わかるわけないじゃない。それ
より、手伝ってくれない？」

プロローグの前の話（後書き）

文章構成が上手な人にご教授いただきたいです。
そして、技の名前が思いつかない……

プロローグの前の話₃ (前書き)

これで終わるはず……

プロローグの前の話3

……痛い

体中が焼けるように痛い。

体中血まみれで来ていた服は切り刻まれ全裸だ。

私の身体は血で真っ赤に染まっている。

その血は私の血だ。

あのとときの私は理性が一瞬で砕け、女と少年（？）を殺そうと襲い掛かった。

かわされて、それと同時に鋭く目に見えない何かで体をズタズタにされる。その繰り返しだった。遊びのようだった。

ふと気づくとそこにいたのは裸で血まみれの私と二人の女と少年

（？）だった。

私の体から血が流れる。

骨は折れてない。これだけのことをされても骨が折れない。

だから立てる。

足が震える。

力が出ない。

血が流れすぎたからかな？

……怖い。

とても怖い。恐ろしい。

もしかしたらここで死ぬのかもしれない。

死にたくない。

私は生きたい。

生きて、生きて、そして満足して死にたい。

もう、嫌だ。

こんな思いはもう嫌だ。

何度死ねばいいの？

何度自分を見失えばいい？

何度苦しめばいい？
嫌だ。

死ぬのも自分を見失うのも苦しむのも嫌だ。
こんな運命なんて大嫌いだ。

死にたくない。殺されたくない。

でも、時間と死ぬ運命は待つてくれない。

でも、最後に道ずれにぐらいしようじゃないか。

私の大事な人たちを奪ったんだ。

……それは当たり前だよな？

だから……殺そう。

死なないために、殺されないために。

未来などなくてもいい。死ななければいいのだから。

さあ、殺そう……。

立ち上がって、襲い掛かる。身体は血まみれだ。だけど動く、だから今ある力を全力で使って攻撃を仕掛ける。

「うああああ！！」

蹴る、殴る。

だけど簡単に避けられる。……あと少し、もうそれだけしか動けない。辛い。でも、諦めない。殺すと決めたから。

衝撃が私の体を貫いた。

見れば何かが私の胸を貫いていた。

……痛い。

痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！

「……………い……………た……………い……………」

声が出ない。

意識が遠のいていく。

助けて……。

お父さん、お母さん、なのは……

もう……、だめだ……、目が見えない。感覚がない、痛いとも思わない。仇が取れなかった。悔しい。お父さん、お母さん殺せなく

てごめんなさい……。

そこで私は倒れた。

涙を流す。

「胸を貫かれてもまだ生きているのですか……。化け物ですか？
あなたは」

少年（？）が私に問いかけてくるけど答えることができない。

声が出ないから。

口を動かすだけだ。

「ああ、声が出ませんか……。まあ、常人ではよくできたほうでしょ」
「よう」

感嘆とした声をあげる少年（？）

「違うわよ。ミカエルよ」

ミカエルって何なんだろう？

わからない。

ミカエルという言葉聞きくと私の体が反応する。

まるで、私がミカエルというように。

なんなの？

ミカエルとはなに？

……？

意識が……。

ここで私は死んだ。

プログラムの前の話₃（後書き）

無印かA・Sどちらから行こうか迷い中……。遅いね、私。

……なぜかプログラムの前の話₄になっていたので修正……

……話につながりがないのでこれも修正……

プロローグ そこは……（前書き）

コメディ要素

主人公は明るすぎます。ルーテシアちゃんのように性格変わります。
ぎです。

A・Sからにしました。

プロローグ そこは……

私は死んだの？

ハイ、そうです。

キヤー、そうなの知らなかったわ！

と、まあこんな感じに一人芝居をしています。

幽霊になって暇だからしょうがないよ。

私、幽霊だよ。

何で幽霊になつてるかというのと、胸を手が貫いて（ほぼ裸状態）、死んで、きがついたら誰もいなくて幽霊になつてて、そこにお父さんとお母さんだと思われる死体があつて、泣いて、おお泣きして、幽霊だから涙でなかったけど。声は誰にも届かないけど、まあいろいろそんなことがあつた。

今でも悔しい。

二人を殺せなかったことが。

でも、諦めた。

私が無力だから、人を殺す力が無いから。私の力では人を殺すことができないから。

だから諦めた。

ただそれだけだ。

今は完全ではないけど立ち直つてる。

だから大丈夫！

まあ、それはさておき。とか私は誰に話しかけてんだか……。

世の中、切り替え早くないと生きていけないのよ！

ちよ！やめて！かわいそうな子を見るような目で見ないで！

痛いわ！突き刺さるわ！ちよいまてい！！幽霊見える奴が何人もいてたまるか！！

待てい！

私の周りには誰もいないだろうが！！ん？なんでできてんだ？私……

…。
だからそこ！こっちは服が無くて裸なんだからみてくるな！ロリコ
ンって呼ぶよ！！

ああ、もういいや。

今日は久々にこちら辺の家に不法侵入しちゃお！

ハイッ！そこ！来ると思ってたよ……。いいでしょ！寂しいんだも
ん！ばれなきゃいいんだもん！不法侵入はね！私の天国なんだよ！！
ハア……。誰もわかってくれない。

でもいいや、よし！この家にしよーと！

えっと、表札は……。八神か。八神さんお邪魔しまーす。

きゃー……。！！

やばいわ！この家！！美少女やら美少女やら美女とか可愛い犬が…

…。

ブハッ！！鼻血が……。幽霊だからでないよ、鼻血。物の例えだよ、
例え。

て、天国だ……。まさにパラダイスじゃないか！

もうだめだ。ここにいたら理性が……。

というわけで二階へゴー！！

この部屋入ってみよ。

ガチャリ。

……。リビングと違って殺風景だね。

も、もしか、いくら汚れてもいいように殺風景なのは……？

う、また鼻血が……。言っとくけど例えだよ、た・と・え。

まあ、ほかの部屋行きますか。

……。おや、まあ、なんかカッコいい本がある。

きれーに装飾されてまあ、美しいですね。オーラがすごいです黒
いけど。

鎖で縛ってあるね。どうやったら取れるかな？

まあ、触ってみようかな。気になるし、感触。

幽霊だから触れないけどさ、ようはその場の雰囲気だよ雰囲気。

ピカーーーーーン!

触ると同時に本から黒いオーラが見える。

……見える?

まてい!オーラが見えるわけ無いでしょ!?

きゃーーーーー!!

体が闇に包まれて周りが見えなくなる。

闇がはれるて目が見えるようになると……

私は人間になっていた。

……はあ?

なんですか!?!これは!?!?!?!!

プロローグ そこは……（後書き）

コメディーに走る。

次回……原作の人たちがメインです。

…感想を下さいよおー！ー！ー！うわーん

プロローグ2 人間になりました。(前書き)

サブタイトルは主人公の思いですね。設定により実際は全然違います。

プロローグ2 人間になりました。

人間になりました。

フツの人間に。

生き返りました。

いえーいと喜んでいます。

あれ？どこに住もう？

まあ、ここから脱出して考えよ。

ドタドタドタ！！

ん？

なんだ？なんだ？

まあ、私は人間に見えないから関係はあまり無いな。

……やばいよ。やばい。

今の私は幽霊じゃないんだった……。

……やばいやばいやばい。

見つかったら察行きだぜ？

どーしーしーよーしー！！！！

頭を抱え込んで座り込む。

とにかく、ベットの下にでも隠れよ！！

そそくさーとかくれた。

バタン！

ドアが開いたよ。

てことは来たか。

「なんもへんなどこないなあ？」

ベットのしたからばれないように覗くと茶髪の短い髪型で車椅子に座っている美少女様がおられた。

……ご馳走様です。

うん、鼻血が出そう。

でも、出たらばれる可能性大なので、こらえてみせるよ。

私は犯罪者というなの変態にはなりたくは無いからね。

「そうですね。主はやて」

そういったのはピンク色の髪の色をした美女様でした。萌えます。

これでカッコいい西洋の鎧を着たらもう最高に萌えます。

しかも、このしゃべりかた。サイコーの萌えですよ。

やば！また鼻血が出そうになっちゃった。

美少女は怖いです。

……出血死しちゃうかも。

「なんだよ。来た意味ねーじゃねえか」

おおここに将来美少女確定の美幼女様が……

長い赤髪を結んでいて、それがまた幼女っぽいといつかなんと
か……

お恥ずかしいけどね。下から見てる側としてはかなりやばいものが見えるんです。

スカートの中がね……。

まあ、どうでもいいとして。それとまったくくけど私は同性を愛すよ
うなほうじゃないよ。どーせーあいしやーじゃないよ。

「はやてちゃん。何もなかったようですから戻りましょう」

この人も美人だけどたいしてもう驚かないよ。

空気だよ。美人なんていちいち言ったら出血死するよ。

「そ、そうやな。もどろか」

そーだ！そーだ！

早くもどれー！

こっちは冷や汗が出てとまらんのんじゃー！

茶髪の女の子の名前ってはやてなんだね。

「主はやて、我々は少し部屋を確認のため少し調べますので先にお
戻りください」

っげー！！

やばいかも……。

「つーか十分やばいよ!!」

「そーか、ありがとうな。終わったたら早く戻ってくるんやで?」
「パタン」

「はやてが出で行く。」

「……さて。ベットの下に隠れている者でてこい」
「ばれてた?」

「しよーがないか、いさぎよく警察に捕まりますか……。」

「へえ〜すごいね。きずいていたなんて」

「いや、フツーに驚くよ。」

「そして、私は以外にも人見知りだったり。」

「……あれ?」

「人の顔を見て。」

「人の顔を見て心底驚くのはどうかと思う」

「てめー、何でここにいんだよ……」

「一番最初に声を出したのは美幼女様。」

「ほかの方にたつては声を出すこともできないご様子。」

「さて、困りましたわ。」

「どうしましょう?」

「お前の名は?」

「お?今度はピンクの騎士様か。」

「いや、名前わかんないし、あだな付けねーとやっていくのは難しい
でしょ。」

「名前かあゝ、ないよ」

「幽霊なつた時点でねえ?」

「名前なんて死んだら捨てるでしょ?」

「ないわけないだろーが!」

「いやはや、そんなことを言われましても……」

「こっちが困ります。」

「ないもんはしよーがない。いくらあがいても何もないところに何
も見出せるはずないんだし」

「……………」

お、だんまり状態？

困ったな。

まあ、いいや。

「さて、お前は自分がどのような存在かわかっているか？」

ピンクの騎士様は質問を投げかけてくるけどねえ？

よくわかりません。

その一言に限るよ。

「わからんよ……………ほっほっほ」

じじいみたいな喋り方だね。

「……………そうか」

少し驚いているようだったけど、すぐに無表情に戻った。

「説明することは可能だが説明をしたほうがよいか？」

首を縦に振る。

「では、まず最初にお前は闇の書の……………」

管制人格だ」

なんじゃそりゃ。

プロローグ2 人間になりました。(後書き)

いえーい!! やつと原作ズ登場!! テンションあがります!!
シグナム……最後なんなんだ!!

面白いかなーと思えば変態的な部分をまぜて見ました。

ちなみに、主人公ちゃんが触れたのは闇の書ですよ。夜天の書です
ね。

転生者(イレギュラー)(前書き)

遅れてすみませんでした!!

これからも遅れることがあるかもしれませんが、絶対に更新します
ので見捨てないでください!!お願いします!!

転生者(イレギュラー)

俺は死んだ。

目の前に死体があるからすぐにわかった。

グロイ。気持ち悪いな。血まみれだよ。

病院かと思われるところに俺の死体プラス俺という幽霊。

怨霊として俺は残っているのか？

まあ、べつにいいか。それはそれで面白そうだからな。

でも、あいつはどうすんだよ？

死んだらずっと一緒にいてやるつったんだ。

一緒にいねえと。

あいつとは俺の彼女だ。

許婚だ。

でも、愛していた。両方が片方に溺愛だったと思うよ。

あいつはどうであれ、ほかの女なんて愛せるわけがないほど愛してたよ。

初恋なんだよな。

一目惚れだ。

初めてあった日は顔が真っ赤になったよ。

この子が俺の許婚だなんて、サイコーだと思ったな。

あいつの見た目カワイイ系というだな。

カワイイ系のドレスが似合うやつだよ。

あいつのウエディング姿見たかった……！

絶対、似合う……！

軽く死ねるね！ あの可愛さで。目がつぶれるよな。きっと。

あいつ俺より先に死んで死ぬ間際に「あつちの世界で待ってるから、一緒に暮らそうね」と言ってる死んじまった。

くやしい。

あいつを守れなかったことが。救えなかったことが。あいつが死

んだとき。俺は無力だということを理解したよ。

死にたくないのにさ、笑ってうその笑顔だつてことぐらいすぐわかるのに俺を安心させるために笑ってたんだよ。

こんなの、理不尽だよな。あいつより俺を殺せばよかつたんじゃねえか？

俺が死んだのとあいつが死んだのとじゃ、あいつが死んだほうが悲しむ人が多いんだぜ？

それでも、あいつなのかよ？ 歪んでるよな。この世界は。

もし、平行世界というのがあるんならあいつと許婚ではなく恋をして、結婚して、子供作つて、平凡で幸せな生活を送りたい。

無理でも、俺は奇跡を信じて歩いていくな。それが幸せへの第一歩なら歩いていくけどな。

流石に死んでるんで無理だけどな。

あいてーよ。

元気か？ 美香よ。俺は今、死んだよ。やっと、お前のところにいけるよ。

なあ、浮気してないか？ 浮気したら俺はお前を……許すか。

何年も会ってないんだ。

浮気をしてても、俺を愛してなくても、お前が幸せなら、受け止めてやるよ。

だから、幸せでいてくれ、俺の許婚よ。

かなわない恋でもいいから、笑ってくれ。美香。いつも笑つてんのがお前だ。お前の笑顔はめっちゃくちゃ可愛いんだ。男なんてお前の笑顔でイチコロだからな。もし、振られたなら、俺のところにくればいい、ぶっ潰してやるから、お前の恋をかなえてやるからな。

なんか俺、言ってること悲しいな。

俺らしくねえ。

パニックを起こしていかれちゃったか？

まあ、いいか。これがきつと、ほれた者の弱みだろうっからな。

何が何でも一度は会いに言つてやるから、待つとけよ。美香。

目の前が暗くなり目が見えるようになったら……

白い空間に一人のしわだらけのジジイがいた。
気持ち悪いと思ったのは秘密だ。

転生者〜イレギュラー〜（後書き）

リア充め……！

しかも、男はべたばれすぎるぞ！

作者を胸焼けさせるな！

羨ましすぎるぞ（彼女が）私も恋人、彼氏がほしいよ！！ 書い

たの私だけどさ。

読者様……私の彼氏に誰かなくなってくれます？

彼氏応募中です！！ なにを言っているんだ、私は！ でも、も

しかしたら……どうですか？

……遅れてすみませんでした！！……

お盆のため、おじい様の家に帰省するので、三日ほど投稿が無理になります。

シグナム達の悲劇

一週間。

私が管制人格となってから一週間がたった。

説明はいろいろしてもらったけど、よく分からなかったからまた後日となった。

あの時、私が見つかっていろいろ質問攻めにあっていた途中にはやてとシヤマルがきて、シヤマルは驚かなかったけどはやてはシグナム達が私を誘拐してきたと思っただけ、ほんの少し騒動があった。

何日かたったからシグナム達に私のことを教えてもらった。

私は闇の書の管制人格でシグナム達は闇の書の主を守って、闇の書のページを集めるヴォルケンリッターというのらしい。闇の書を見せてもらったことはないけど、白紙らしい。何にも書いてないといわれたから変なのと笑った。

シグナム達は私が出てくるには主の認証と闇の書の頁400頁以上集まらないと私は出てこないそうで、何故だ？ とか言ってた。

今でも分からないらしい。はやて曰く「別にどうでも言いやないか。スノウがいて困ることはないやろ？」嬉しかったけど、こんな私がこないいい人に恵まれていいのかな？ と思った。

はやての関西弁はなに言ってるかよく分からないときもあるけどおもしろい。

はやての車椅子生活はいつから？ と聞くと大体生まれたときかららしい。はやてもよく分からないらしい、「物心ついたときからそうだったんや」といつてたから。

私は今、はやての手伝いをしている。

洗濯物を干したり、シヤマルの代わりにはやてと買い物に行ったり、一緒に料理を作ったり。「スノウは料理上手やなあ」といつてもらった。

スノウというのは私の名前。

はやてに「何がすき？」といわれて「雪」って言ったら、「そうか、じゃあ、あなたの名前はスノウや」名前をはやてが私にくれた。嬉しくて少し泣いてしまった。はやてが「何で泣くんや？」って不思議がってたけどそれだけ名前をもらえて私は嬉しかった。

「はやて！ 洗濯物干すの終わったよ！！」

リビングの掃除をしてるはやてに大声で話しかけた。

「そか！ ほな、お掃除を手伝ってもらおか」

はやても私に負けじと大声を張り上げて答えてくれた。

シグナム達今頃なにやってるんだろ？

はやてと私を手伝わすにどっか遊びに行つて……。

あ、そーだ！ シヤマルのご飯でも食べさせてみようか……？

おもしろそう。

よし！ そうと決まればシヤマルが帰ってくるまでに食事を除く家事をすべて終わらせてやる！！

「うん！！ いまいくね！ はやて！！」

はやてのいるリビングに走り出した。

リビングにつくとはやてがいて、掃除をした。

「早く終わらせよう。はやて」

「そやな」

はやてが微笑んで答える。

……シグナム達よ、私達に家事をまかせつきりにしていたことを後悔するがいい……！！

「なあ？ シヤマル、私はとてつもなくさつき悪寒が走つたのだが何故だと思っ？」

シグナムはシヤマルに問いかけた。

「あら、奇遇ね？ 私もよ」

シャマルもシグナムと同じように何か悪寒を感じたようであった。
「もしかしたら今日、主はやてに何かあるのかもしれない。今日は早めに切り上げよう」

シグナムは唐突に告げた。

「そうね。そうしましよう。もしも、はやてちゃんに何かあったら私達は……」

「シャマル。ヴィータとザフィーラへの連絡を頼む」

シグナムはシャマルの言葉を区切り、告げた。

「え、ええ。分かったわ」

シャマルはヴィータとザフィーラへと念話をつなぐ。

（レヴァンティン。我らヴォルケンリッターは主はやてが死んだとき我らは正気を保てるだろうか？
分かんないな。

レヴァンティンよ。闇の書の蒐集はいつおわる？ いや、レヴァンティンにきいてもわからないか。すべては我々の動きによって変わるのだからな）

レヴァンティンは静かに主へと「JA」と答えた。

それを聞いたシグナムは私はいいいデバイスをもったものだなと思っ
った。

「終わったわ。ヴィータちゃんとザフィーラもすぐ戻るそうよ」

それを聞いてシグナムは守るべき主の家へとシャマルとともに転移した。

……この後起こる悲劇を知らずに……

この日、八神家ではスノウとはやてを除くシグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラは体を壊したらしい。

数日間、はやてによる介護があった。

そんなシグナム達を見てスノウは笑っていた。

シグナム達は自分の勘を恨んだのだった。

シグナム達の悲劇（後書き）

やっと更新できました！！

シリアスこないかなあ？ と待っておられる人がいたら物語の終盤でかなりシリアスが入ると思います。期待しといてください！！
その期待にこたえられるかどうかは別として。

暖かいコメディーが書けなくなってきた今日この頃……。

一日（前書き）

ギャグ、ネタが多いです。最後らへんだけだと思います、本編に
係るのは。

が三つあるところが主に本編です。それまではあまり本編に関係
ないです。

一日

今日もシグナム達はどこかに出かけてる。

本当に困ったもんだよ。

たまには一日中、家にいれば、はやてが寂しくないと思うんだけど。

はやて、私やシグナム達がない時やどこかでひっそりと私たちに心配をかけないように一人で泣いてる。シグナム達は気づいてないかもしれないけど、はやてを泣かせているのは、寂しがらせているのはシグナム達だ。

怒りたい。

なんで、はやてに寂しい思いをさせるの？

一人で私たちに心配かけないように泣いてるんだよ？

でも、私が言うんじゃないでシグナム達が気づかないといけなから。

今日はどこに行ってるいるんだろう？

ヴィータはどうせ、老人会。

シグナムは剣道を教える道場だと思う。

シャマル……ザフィーラ……あの一人と一匹が行きそうな場所はないんだけど……。

シャマル、お前が一番謎なんだよ！！

料理教室にでも通ってるの！？

あれであの不味さ？

ありえない……。

それとも、料理教室だと美味しいの！？

普通の料理に使うものしかおいてないし、先生がいるから！？

料理教室で美味しいのならちゃんと先生方に教えられたこと守っ

て料理作って！？

へんなアレンジとかいらなから。

食べれそうにないもの入れないで！！

ザフィーラはペットシヨップだろ！？ 獣は己の欲に忠実とか言うし！！

いい餌がほしいのかい！？ 何でもいいだろ！ ザフィーラは狼だとか行ってるけど、普通のペットシヨップに狼用のえさとかないから！！ 犬だろう？ 犬だと認めるよ！！ ……うん、ちよつと自重。

でも、それぐらいあの二人が行きそうな場所は謎だ。話が脱線してるね。

というわけで……、後をつけてみる。

シヤマルを探そう……。ザフィーラも。

探偵スノウ登場！

おなじみの格好。

茶色チャック柄のコートに同じ茶色のチェックの帽子と虫眼鏡。

似合うだろ。

銀髪と相性いいと思う。

いや、私の視点だし、よくわかんない。

服なんてTシャツに短パンだし。

この服装動きにくいし、熱い。

熱いけど、我慢だ。

夏とか倒れるね。

熱中症だ。

というわけで……、シヤマルを探しに行こう。

ザフィーラのこと忘れてた。

存在感のなさでは最強だね。ザフィーラ。

便利なスキルをもってるよ。ザフィーラは。

暗殺とか簡単すぎるでしょ。

存在感というものがないんだから。

怖いな。

ザフィーラ。君は怖いよ。

……本当に怖くなってきたからこの話題はやめよう。
今度こそ一人と一匹を探しに行こうと。

あ……あの一人と一匹はどこに今いるんだ……？

明日でいいや！

明日で！

今すぐ見つかるような場所にいたら話は別だけどどこにいるか分からないし……、無理。

世の中さ……どうにもならないことってあるんだよ。

それがたまたま私のところに現れただけ。

ただ……、それだけなんだ。

名言言った気がする！

カッコいいかも。

服……、着替えよ。

熱い。動きにくい。何ではやての家にこんなものがあるんだろう

……？ いまさらだけど。

さっさと着替えるか。

ほいつと綺麗にたたみもせず、探偵服を放り出し、Tシャツを短

パンをクローゼットから取り出して着がえた。

きゃぴきゃぴとピンク色の声を出してもいいお年頃にTシャツ短

パンか……、すこし、やばいぞ。

時代遅れという言葉が当てはまらないか？

当てはまる。

やばいぞ。

時代遅れだぞ。

まあ、いつか。

どこかに出かけるんじゃないんだし。

べつにいゝ。

私は管制人格だしいゝ、人間様じゃないし。

いまさら着替えるの面倒だし。

私はシンプルで楽で面白いほうを選ぶ！

面白くはないけどさ。

はやての手伝いとか、しなきゃいけないことあるけど今日は面倒だ。

後でしよう。

……暇だ。

どうしようもなく暇だ。

はやての手伝いとかすればいいんだけど、面倒だ。

なんか食べ物でも作るか。

前、はやてにパソコン買ってもらった。

へへ。パソコン好きなんだ。

かつこいい。

キャリア〜！！ って感じがして。

色々、パソコンをインターネットにつなぐなどしてインターネットの出来るようになった、このハイテクなパソコン君は便利に程遠い代物だった。いや、慣れればかなり便利なんだろうけど。

説明書を見たり、タイピングというのが面倒だった。

学校とかで教えてもらえるらしいけど、行ってないし、行けない。

はやてもパソコン君には詳しくなくて、撃沈。

どーんつと大きな壁にぶちあつたが、店員さんにそのことを言うところから最後まで一般的なことを教えてもらった。

そんなことがあり、私はパソコンを一般人並みに扱えるようになり、パソコンデビューというものが出来た。

まあ、どうでもいいパソコン君との出会いは置いといて、インターネットを使い、料理サイトを探して、なんか食べ物を作ることにした。

最近、テレビとかでやってる魔歌論の作り方があった。

魔歌論はピンクや黄色などのカラフルな色をした生地を焼いて、焼きあがった生地にクリームをサンドした、とっても可愛いお菓子だ。

その名前の由来は、

あるお菓子職人がお菓子を作った。
そのお菓子は今まで誰も作ったことのない、誰も食べたことのないお菓子だ。

綺麗な色をしてそして、おいしい。

そんな夢のようなお菓子だ。

そのお菓子を作った、お菓子職人の名前は瞬く間に広まっていき、お菓子界の頂点になった。

魔王がいた。

女性でしかも甘党であった故にそのお菓子が食べたいと家来に命令し、そのお菓子を作った職人を誘拐させた。

お菓子職人は誘拐されたにもかかわらず、喜んでそのお菓子を作り魔王に差し出した。

魔王はそのお菓子を食べた。

そのお菓子のおいしさに魔王は歌うかのように演説を論じた。それ以来、魔王が歌うかのように演説を論じた。

という、噂が広まり、魔歌論とのお菓子は呼ばれ続けた。

と、なんかとても信じがたいファンタジーな話が魔歌論の名前の由来らしい。

まあ、この世界、魔法があるだけでファンタジー要素あるけど。

この世界の人は知らないだけで次元世界がいくつもあってその中には魔法の存在する世界があるらしい。シグナムが言っていることだから、本当のことなんだろう。

さあ、レシピもパソコン君で発見できたし、材料準備してお菓子を作ろう。

基本私は甘党なのでお菓子を作る。

好きなものと嫌いなものだったら好きな物のほうがいいし。

えーと、材料は………、あった。これだ。うん。全部ある。クッキングタイム。

一時間の時間を費やし、私は魔歌論作りに成功。
ちゃんと膨らんでます。
いや〜いいものですね。
いい匂い。

魔歌論の匂いが私の嗅覚を伝って、食欲を刺激する。
今すぐにも食べたいという欲求に駆られるが、耐える。

皆で食べたいから。

綺麗に色もついて。

目の保養になるよ。

色は薄いほうが綺麗だと思う。

……クリームは？

和んでる場合じゃなかった!!

間にはさむクリームがなければおいしさが半減だ!!

その後、私は五分程度時間を費やし、魔歌論用に生クリームを泡立てた。

少しあまった生クリームをデコレーションで飾りつけ、冷蔵庫で冷やしておいた。

ごはんのあとで、デザートとして皆で食べようと思う。

ありゃ、はやてじゃないか。

さっきまで、洗濯物と戦っておられたのに。

一時間三十分もかけて洗濯物を干すとは……車椅子生活はとても大変だろう。

私はその間、魔歌論を作っていたけど。

罪悪感はあるはある。

でも、それを言葉にしちゃいけないよ。

それは同情してるってこと。

同情ほど人を傷つけるものはないから。

「おい。はやて婆さん。洗濯物との戦いは終わったかいのう？」

「はやく婆さん……いいかも。」

「なんですか？ スノウおじ様や」

「堂々とこの華麗なスノウ様をおじさん扱いとききましたな。」

「少々、ぼけてこられましたな。私はおじさんという男ではなく、まだ、おばさんか美女ですぞ」

「へへん。女だもんね。男じゃないんだから！」

「あらまあ。そんな見た目で女性とは驚きましたわあ」

「この野郎。どこのプライドの高すぎて高飛車女で金持ちの女だ。貴族みたいないやみを言ってきたよって。」

「はやく。その言い方はさすがにどうかと思う……」

「精神的に痛い攻撃をしかける。」

「ダメージは大きいはずだ。」

「名づけて、引くわあ……作戦だ。」

「いや！ いや！ そこでひかんといて！？ めっちゃ、私がかわいそうな子みたいやん！！」

「ダメージ絶大だ。」

「効果絶大だ。」

「この勝負……私が勝ったかな？」

「冗談だよ。はやくはかわいそうな子というか、変な子でしょ？」

「そっちのほうに酷い!？」

「嘘だよ。冗談に決まってるでしょ？ はやては、はたてだよ。かわいそうな子でもなくて、変な子でもない。はやては、はやて」「言ってくれるのは嬉しいんやけど、最初からそういつてもらえるかな?」

「強欲は己の破滅に導くって言うし、望みすぎちゃダメだよ、はやて」

「強欲じゃないんやけど……」

「細かいことは気にしない。気にしない」

はやてってば、こんなんじゃ、将来は口うるさい姑になっちゃうよ。

嫁姑問題ここに極めたり。という感じで。

はやておばあちゃん! って孫が呼んでくれないよ? 口うるさいと。

「なんか、スノウめちゃくちゃに私の文句言ってへん?」

「そんなことないよ。あはは、あははははー!」

誤魔化した。本当のことだと言っててもいいことないし。逆に悪いことばかりだし。だったら、言わないほうが得だね。

「うさんくさいんやけど……。まあ、ええよ。今日あったことは忘れよ……」

げっそり。とした感じにため息を吐いてはやてはポツリとつぶやいた。

さすがにそれは私でも傷つくぞ。

まあ、嘘だけだね。

そう簡単に傷つくほど、弱くないさ。

「はやてー、今日、お菓子作ったからさ、ご飯食べた後に皆で食べようっ。」

スルー。

話の話題を変える。

へへ、自分にとって都合の悪いことはすぐに忘れる主義ぞ。

「ええよ。何を作ったんや？」

「魔歌論」

「難しいお菓子作ったんやねえ。すごいな、スノウは」

「でしょー。大変だったんだよ」

何気に自分のことを自分でほめる。

ナルシスト君じゃないんだよ。

ただ、寂しいだけなんだ。何に寂しいとは言わないけどね。

「マカロンを作った後の片付けはした？ スノウ」

「したよー」

そういつて、人差し指で魔歌論を作るのに使った場所や器具を指す。

どれもピカピカと光り輝いているよ。

洗うという作業は好きなんだ。地道な作業だからね。

地道な作業は好きだ。楽しい。

さて、このまま、リビングでごろーんと転がってますかね。

「はやて。私はここで夕食までここにいようと思う。寝るから、起こさないでね？ 起こしたら起こるよ」

割と本気で言っておく。

いい気分で寝てる中、起こされるとか最悪だから。

「わかった。じゃあ、ゆっくり休みや。夕食まで起こさんからな」

理解してもらえて私は嬉しいよ。

さて、寝るとするか。

「っ！ こじはどこだ？ 俺は……」

俺は神に頼まれてこの世界に飛ばされて……。

おい、待て、何で俺の声こんなに高いんだ？ これじゃあ、まるで、声変わりをしていない少年の声じゃないか……！

って、おい！ まさか……！ 俺は幼くなったのか？ 名探偵の登場するアニメじゃないんだぞ？

とにかく周りに鏡のような、自分の姿が見えるものはないのか？ 周りを見渡すが、森で囲まれているため、鏡などない。

森に鏡があるなどどれだけ異質な風景だよ……。

とにかく、森から抜け出さないと。

うん？ 川があるな。

水に俺の顔が映る。…… 大声で叫びたい。

「やっぱり、そうだったのかー！！」
俺の体は……、少年 8〜10才 になっていた。
なぜこんなことに……。

一日（後書き）

スノウの容姿ですが、a・sの管制人格です。
変えずに、やりたかったんで。

スノウは人間らしさ、を求めて書いているので、人間らしいと感じていただけたら嬉しいです。

家族（前書き）

十一月は、閏風更新月です！

家族

今日は、今日こそ、シャマルとザフィーラの行動を探ってやる。あの二人ほど行動が分からない、どこにいるか見当がつかない人はいないと思う。

というわけで、心配をかけないように、はやてに一言、言ってから、ザフィーラとシャマルを探しに行くことにする。

「はやてー！」

リビングから、大声で呼びかけた。

だって、はやてがこの家のどこにいるかは大体は見当がつくけど、そこにいるかは限らないし、探し回るのは面倒。

なら、この家にいる人、全員に聞こえる音量で呼びかければいいと、いつても、今の八神家には、はやてと私しか、いないけど。ほかはお出かしているから。

「なんや？ スノウ」

車椅子に乗った、はやてが呼びかけに応えてやってくる。
狸。

将来、狸になる気がした。もちろん、はやてが。

はやてが大きくなる頃には、もう、私はいないだろうから、わかんないんだけど。

「ちょっと出かけてくる。お留守番よろしくね」

「分かった。気おつけてな？」

「うん！ 大丈夫だって！！」

大声で、元気よく応えた。

心配かけないように。

ああ、でも、はやて家に一人か。寂しくないよね？

はやてが心配。

寂しくないかな？

だって、はやてが私は大好きだから、心配する。

今日だけだから、今日だけ家を離れるから、だから、そんなに寂しがないで。

胸がチクリと痛んだ。

はやてを、一人にするということに対する、罪悪感だろう。

でも、決めたから。シャマルとザフィーラのお出かけ先を探すつて。

いい情報が見つかるように、がんばろう。

「いってきます！」

「いってらっしゃい！」

沈黙が数秒続いた。

そして、大笑い。

だって、リビングで言ったんだから。

玄関で言うようなことを、リビングでいったんだ。

いってきます。いってらっしゃい。って。

しかも、真面目に。大真面目に。大声で。

おかしい。だから、笑う。だから、笑えた。

はやて。もっと、笑って？

もっと、いままで寂しい思いさせたのを全部、帳消しにできるくらいに。

はやてが、笑うから、笑える。

はやてが、悲しんでたら、私も、私を含めた、家族全員が、はやてのことを大切に思っているから、一緒に笑い会えないよ。

はやて、ただ、皆、はやてを主としてみてるんじゃない。本当は、家族としてみてるんだ。

ヴォルケンリッターの皆は、初めての家族だけれど、大変だけれども、はやてのことが大好きだから、不器用に、だけど、まっすぐに、家族をしている。

だから、笑って。

どんなに、大変だって、はやてを支える。主だから、とかじゃない、家族だからと。

闇の書は、闇の書はすごいんだよ。管制人格の私は闇の書と同じくらいすごいんだよ。

だから、強いから、支えられるよ。はやてを。家族として。

「いってきます。と、いってらっしゃい。は、玄関でしょな」

「うん。そうだね」

笑い終えて、はやてと　はやての車椅子を、玄関へと運んだ。

そして、息を整えて、

「いってきます」

「いってらっしゃい」

と聞いた。

いってきます。はやて。

家族（後書き）

基本、間風は終盤まで、物語の進み具合かなり遅いです。

進み具合が遅くないと、スノウやボルケンリッターと、はやての心情が書けません。文才の無さを恨む……。

助ける。そう決めた。(前書き)

主人公以外のキャラが視点で登場です。最後は三人称なのですが、やっぱり、苦手です。

助ける。そう決めた。

どこにいるんだろう。

朝早くから出かけたらしく、朝起きるのが苦手な私には、朝早く起きるのは無理。おきれたとしても、気づかれずに終えることは、まずないだろうし。だって、寝ぼけてるはずだから。

うーん。

どうしよう？

あごに手を当てて、名探偵が推理するときのポーズをとる。

よし、あたって砕けるだ。

あちこち探し回ったら、見つかる。……、はず。

二時間。

二時間も私は探した。

いつもは、はやての手伝いをしたり、ゴローンと転がっているんだけど。お布団に包まって。

さすが、人間ではない、管制人格。

体力が尽きることは無いようだ。

でも、時間はたつ。

今日中には、見つからないかもしれない。

それだけは避けなければ。

はやてが……。

今日中には見つけてやる！！

「ヴィータちゃん、ザフィーラと行ってもらえるかしら？」

そういつて、二人に前もって作っていたカートリッジを渡す。
シグナムは先にいつている。

私たちが闇の書の頁を集める理由、それは、はやてちゃんのため。
私たちは、家族というものを知った。

家族がどれだけ暖かいものかを。

家族といるとどれだけ幸せなのかを。

なにより、家族の大切さを知った。

だから、守らなくては。

だから、助けなくては。

はやてちゃんは、闇の書に犯されてる。

呪いに、犯されている。

早く、闇の書の頁を蒐集して、呪いから助けないといけない。

じゃないと……、

はやてちゃんが、死ぬ。

どうにかしなければいけない。

守らないと。

死なせはしない。

闇の書の呪いなんかで死なせるつもりなんてない。

私たちは、闇の書を完成させて、私たち四人と、はやてちゃんと、
管制人格^{スノウ}で、幸せな家族になるわ。

例え血はつながって無くても、強い絆があるもの。大丈夫。

はやてちゃん、必ず、あなたを助けてみせる。呪いから救って見

せるから、安心して待ってて……。

「なあ、ザフィーラ。なんで、管制人格は、蒐集に関係してないんだ？」

昼間、次元世界の空を飛んでいる中、ヴィータは、ザフィーラに疑問を問いかけた。

「聞いていなかったのか？」

ザフィーラは、ヴィータに少し呆れた声で返事した。

「うん？　なんかあったけ？　まあ、説明してくれ」

話を聞いていないヴィータに、視線を送ると顔が赤くなってゆく。

「な、なんだよ！　何にも聞かされてないんだからしょうがねえだろ！？」

ザフィーラは、ヴィータも絶対にあの話をしている場にいたはずだと、記憶をたどって思い出したが、言えばさらにこの事態を悪化させてしまいそうなので言うのをやめることにした。

「管制人格には、力が無い。頁が少なく、魔法の扱い方を知らないのだ。前の主のことも知らぬ。記憶が無いのだ。記憶が。だから、一緒に蒐集するわけにも行かない。足手まといになる。なにより、主を一人にしないためだ」

前の主。

酷い主だった。

闇の書の主は大体、ヴォルケンリッターを道具としか見ていない。頁を集めるだけのただの道具としか。

今の闇の書の主、はやては違った。

あの年で闇の書の主であるのもそうだが、なにより、今までの主と違って、ヴォルケンリッターを家族と言って、接してきたのだ。

はやての向ける家族愛という感情に、最初は戸惑ったが、皆、嫌ではなかった。

ヴォルケンリッターは、はやてを愛し、守ると誓いを作った。それでも、心配はある。

一人にしてしまうことだ。

ヴォルケンリッターは、はやてを守るために闇の書の蒐集をし、いなくなるのがほぼ、毎日だ。

しかし、そんな時に都合がいいことにスノウ。闇の書の管制人格が現れた。

はやてには、管制人格を呼ぶ必要もないし、管制人格の存在を知れば、罪悪感にとらわれるだろう。

だから、言わなかった。

実際は、はやての認証がいる中、勝手に管制人格は現れ、力の無い中、現れたのだ。

これを使う以外に何がある。

そして、管制人格をはやてのそばに置き、はやてが寂しくないように。と、管制人格を使った。

(管制人格、主をそばで見守っていてくれ……)

小さな願い。

それは、無常にも現実の前では、価値の無いものだ。

願いは、届かぬまま、叶わぬまま、物語は終わりを告げる……。

助ける。そう決めた。（後書き）

最後は、シリアスを入れてみた。

まあ、シリアス道理の終わり方になるのは言うまでも無いです。

ハイ。

終わりまでかなりありますけど……。先に、予告もどきを入れました。

闇風についての意見、感想、誤字、脱字等があれば感想のところを書いてください。

……、三人称がうまい人、教えてください。苦手……。三人称のうまい小説に心当たりのある方は、教えてください。

なんなんだよ。(前書き)

あの人が登場。

覚えている人はいるのだろうか……？

なんなんだよ。

次の日がたちました。

昨日、見つからなかった。

なにあれ！？ どこにいるの！？ という、状況に……。

異次元にでも言ってるの！？

魔法があるからって、それはありえないだろうけどさ……。

諦めモードだ。

諦めるしかないのか？

あきらめたくないなあ……。

でも、諦めるしかないのかなあ？

はやてを一人にしたりしたくない。心配かけたくないし。

こんなはずじゃなかったんだけどなあ。

運命なんて、そんなものだよ。

と、言われてしまったらそんなものなただけだね。

あいつらは、どこにいるんだろう？

あいつら 私を殺した人。

目は見えなかった。

ただ、声だけ。

女の人の声と、小さな、少年の声。

きつと、生きてる。

まだ、生きてるんだ。

あの人たちは。

私は死んだけど、生き返ることができた。

反則的な行いだけど。人間じゃないけれど。

生き返ることはできたんだ。

人が私に気づいてくれているんだ。

私は、生きているんだ。

私には、守りたいものがある。

はやて、シグナム、シャマル、ヴィータ、ザフィーラ。
皆を守りたい。

皆のそばにいたい。

一緒に笑いあっていたい。

ダメなのかな？

でも、そばにいたいよ。

皆には泣いてほしくないから、傷ついているのなら、駆けつけるから。

泣かないで。それ以上、傷つかないで。

皆が、どこで何をしてるのかを知りたい。

知ることができれば、すぐにでも駆けつけられるから。

だから、探すよ。ザフィーラとシャマルの行ってるところ。

あの、ジジイ。

人を変なところに落としやがって。

神とか何とか言うから、狂人ではなく、本当の神だったことには驚いたが。

ハゲだったけど。

それにしても、どこに落ちたんだ？

ミカエルがいる場所の近くとは、聞いたが、地名など何にも聞いてないんだが。

みわたしても、どこにでもありそうな路地。

これだけで、どこかを判断しろだなんて分かるわけが無いだろうが。（ちなみに、衝撃が襲ってくるかと思ったが襲ってこなかった）

「うにゃあああー！」

なんだ？ この、アニメとかにありそうなロリボイス。

叫びもなんか、アニメっぽいし。
狂人か？

神もなんか、アニメがどうたらはなしてたが、どうでもいいから
聞いてないし。

神なんか最後はもう、

「最高じゃあああー!!」

とか、言ってたし。

気持ち悪かった……。

老人が急にアニメのことで叫びだすんだ。
気持ち悪い。

「ユーノくんが!! ユーノくんが……!!」

ロリボイス少女。

が、目の前に迫っていた。

ツインテールの茶髪の少女だ。

可愛い系という感じだろう。

ロリコンじゃねえよ。

俺が愛してるのは、美香だけだ。

小学生に心を奪われるわけが無い。

ミカエルを見つけて、神のところへ連れて行けば美香と再会でき
る。

だから、さっさと見つけてやる。

目のお前に迫ってくんな。

しかも、人の目の前で叫ぶな。
うるさい。

「なのはー!!」

遠くから別のロリボイスが……。
金髪!?

外国人さんか。

「あ、フェイトちゃん!」

元気そうに目の前にいるロリボイス少女は、金髪少女の名前(だろっ)を呼んだ。

「なのは、ユーノは……?」

ユーノって誰だ?

ここには、いないが……。

「あ、ユーノくん! にゃはは、忘れてた……」

哀れ。ユーノ。

忘れられているとは。

ドンマイだ。

「えーっと。その、そこから少しどいてもらえませんか?」

何をされるか分からない。そんな表情がロリボイス少女の顔に浮かんでいた。

目の前にいるのは、ロリボイス少女。

後ろには、同じく、ロリボイスの金髪少女。

……、なんで、目の前にいるんだ?

こんな背の小さな少女が、成人の俺の前に。

目の前に顔が見えるんだ?

もしかして、もしかしたら……、俺の背が縮んだのか？
沈黙。

目の前のロリボイス少女が叫んでいるが、無視。放置する。
周りを見ると、お店があった。

お店のガラスが光を反射して、少年の姿を映していた。
そこに映るべきなのは、俺の姿。

なのに、少年。

単に背が縮んだってわけじゃない。

見た目がまったくの別人となっているんだ。

「……、なんなんだよ」

ようやく絞り出した声。

それは、むなしくも誰にも聞こえないほど小さなものだった。
神よ。なぜ、哀れな子羊にこんなことをしたのだ。

なんなんだよ。(後書き)

覚えていない人はいますか？　いますよ。ここに。私も存在忘れてた。

彼のことを忘れた人は、転生者(イレギャラー)を見てください。サブタイトルが思いつかないので、セリフから一つ持ってきまして。

短くてごめんなさい。

フェイト

状況を整理させてくれ。

まず、俺は神に異世界に飛ばされた。

そして、落ちたところは知らない場所。どっかの路地だ。

そこで変なロリボイス少女、あとからもう一人きた。

……、次が問題なんだよ。

そう、次が問題なんだ。

俺の体が少年になつていたことだ。

恐らくは、神が俺の体を弄つて、見た目を変えたんだろう。

しかし、なんで俺はこんな好青年な見た目なんだ。

優しそうな好青年なんだ。

顔立ちがかなり整つた好青年なんだよ！

普通の顔立ちでいい！

当て付けか！？

当て付けなのか！？

……、そうとしか見えない。

前の俺は人相の悪い顔（友人談）だった。

何で俺の顔は、好青年なんだよ！？

頼むからやめてくれ。

この少年体型も直してくれ。

いつもの俺の見た目になおしてくれ。

じゃないと、殺すから。

殺す。ぶっ殺す！！

と、言つても、そんなことをした本人がいない……。

とにかく、状況の整理はできた。

さて、情報収集だ。

「うなやああ！！」

何の叫び!?

なに言ってるの!?

目の前にいるのは茶髪のツインテールロリボイス少女。

その後ろには、状況を整理できておらぶ慌てふためく金髪ツインテールロリボイス少女。

ここは、情報収集のために声をかける。

「どうしたんだ?」

「ふえ?」

「ふえ?」とか言わないでくれよ……。

まともに情報収集ができそうにないんだが……。

「……、あ、すみません! あの……、その……」

言葉を濁す。

すみせんまでは聞こえたんだが、その後は良く聞き取れなかった。

「あの、もう一回、言ってもらっても?」

「ふえ!? あ、はい! その、足をどかしてもらえませんか……?」

「あ、ああ。分かった。これでいいか?」

素直にロリボイス少女の命令に従った。

足をどかした。

足元に何があるのか気になったので見ると、不思議生物がいた。フェレットのような、そうでないような感じの。

不思議生物だ。

それもかなり不思議な。

「……、気持ち悪い」

「ふえ？ 大丈夫ですか!？」

うん、見た目が。

と答えることはできない。

目の前の少女は、俺の気分が悪くて気持ち悪い。といったのだと勘違いをしているからだ。

あ、目を覚ました。

……、胡散臭い動物だ。

「な、なのは……？ と、あなたは誰ですか？」

しゃ、喋った……。

「喋った……」

「え？ きゅ、きゅ」

今更ごまかすか。

それはさすがに無理があるような……。

「つと、すいませんでしたー!!」

目にも留まらぬ速さで去っていった（フェレットを抱きかかえて）金髪の子はその場にあっけに取られてこの場に残っているが。

「ちょっと、いいですか？」

「は、はい……」

なんか警戒されている。
俺、なんかしたのか？

まあ、いい。長い付き合いになることは無いのだから。

「ここ、どこですか？」

目を大きく見開き、閉じた。

「あの……、もしかして、次元漂流者ですか？」
「なにそれ？」

なに言ってるんだ？
じげん……、なんとかってなんだよ。

「あ、いえ……。ここは、海鳴市です」

……、海鳴市。

なんだ、それは。
聞いたこと無い。
いや、もしかしたら……。

「四十七都道府県いえるか？」

「……、なに言ってるんですか？ 日本に都道府県は、四十ですが
……」

なんだって!？

四十七だよな？

俺が違うのか!？

俺の常識が違うのか!？

嘘だといってくれ。

嘘だといってくれ……。

「嘘だよな？」

一歩、少女に近づく。

少女は一歩、後ろに下がる。

「嘘じゃなくて、本当です」

いや。

なにこれ。

やめてくれ。

俺の常識を壊すな。

……、ちよつと、待て。

俺の住んでいた世界の常識。

そしてここは、異世界。

俺の常識が通用するわけがないんだ。

異世界なんだから。

そつだ、俺の常識は間違っていない。

「そつだろつ？」

「え……？」

顔を引きつらせる少女。

明らかに戸惑っている。

どうしたものか。

「えつと、その、もう、行っていいですか？」

戸惑いの視線を俺に向け、問いかけてきた。

「ここらへん、案内してくれないか？ 土地勘がないから良くわからなくてな」

それで逃すわけには行かないので、案内を頼んだ。

「……、分かりました。えっと、その、喫茶店で休憩しませんか？ 立ちっぱなしはつらいでしょうし、地図も貸してもらえらると思えますよ？」

喫茶店といっても、金が無いんだが……。

まあ、そこは、あの子が出してくれると思いつつ（しかも、俺は幼くなっている）、聞かない。

「なあ、名前聞いていいか？」

「あ、そうですね。フェイト、フェイト・ハラオウンです」

「そうか。俺の名前は、東雲修也だ」

「しのめしゅうや？」

見た目どつりの外人さんだけに発音が違う。

「違うよ。東雲修也だ」

「……？」

首をかしげて違いが分からずに悩んでいる。
面白い子だ。

「ま、喫茶店へ行こう」

「はい」

俺とフェイトは喫茶店に向かった（フェイトに俺は案内をされて、
だが）。

フェイト（後書き）

若干、フェイトの性格が違う気がします……。

こうしたらフェイトらしい。という、アドバイスがあれば、教えていただけると助かります。何気になのはの扱いが酷い（私かなのはへの）。

ユーノって、空气的存在に近かったですね。それがユーノなのか
もしれない……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6151s/>

魔法少女リリカルなのは～闇を背負いし風～

2011年11月20日19時31分発行